Acanthus

（土浦一高・旧土浦中学とその周辺の物語）

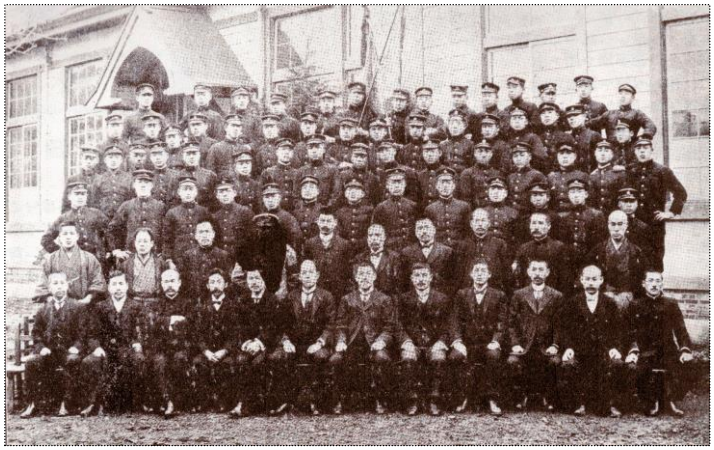
第１８９号　2025（令和７）年５月１３日

茨城県立土浦第一高等学校

進修同窓会旧本館活用委員会

ＨＰhttp://www.sin-syu.jp/

進修同窓会 HP にアクセス



中１２回生（『進修第 17 号』1914［大正３］年３月発行）

土浦中学校の修学旅行　２

明治 40 年代に入ると、土浦中学校の修学旅行は、年度により多少の違いはありますが、１年県北、２年東京、３年鎌倉・横須賀、４年日光、５年箱根が定番のコースとなりました。今号から各コースの旅行記を辿っていきます。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。なお、引用文中の【　　】は筆者による注記です。

県北　1908［明治41］年　中12回生1年次

10月19日、土浦駅8時11分発の下り列車に乗り込み、助川駅（現日立駅）下車。助川駅から日立鉱山専用電気鉄道(注1)の、建設中の線路沿いに歩き、日立銅山へ。1905年から久原房之助が経営に乗り出し、本格的な開発が開始された銅山は、

「……、銅山の鉱場はさまで【然迄　あまり　たいして】広からざる由なれども初めて見たる我々には一として驚嘆せざるはなし、機械の運転場にては聾せしむるが如き轟々たる音に小さき胆玉【肝玉】を冷し、溶鉱炉にては紅龍躍るかと狭き胸を轟かし、亜硫酸瓦斯を含める煙の濛々として漲るには、息もつまるかと思はず念仏を申しぬ。……。」（『進修第12号』（1908年12月発刊）「修学旅行の記」第一学年田口信）

と、初めて見る銅山の光景に驚きを隠せませんが、煙害も凄まじかったようです。

見学を終えた一行は、銅山から

「……、飢渇交々【こもごも】至れども口にすべき一滴一粒だになく足は疲れて一歩も進み得ずなれり、されど有ん限りの勇気を鼓して、闇き道をたどり、互いに励まされつ励ましつ辛うじて下孫【現常陸多賀】に到り、……。」

下孫からは宿の迎えの者に案内されて河原子の岩崎楼に到着しました。

20日、岩崎楼から約10㎞の行軍。常陸太田に至ると、太田中学校で昼食。西山荘を見学した後、太田停車場から水戸鉄道の列車で水戸駅まで乗車。水戸下市の船着き場から那珂川を蒸気船で下り、大洗祝町で下船し、大洗金波楼に草鞋の緒を解きました。

最終日21日は、高田保（中12回）(注2)が『進修第12号』に「大洗より」を書いています。当時、弱冠13歳。「実の生(な)る木は花から知れる」、その表現の巧みさは、後年の筆の冴えを暗示しているかのようです。

「大洗より　第一学年　高田保

（一）十月二十一日

昨夜の茶も菓子もなき茶話会の疲れに、ぐつすりと寝込みしを、ゆすり起されて、眼は覚めぬ。雨戸を開けば、薄暗き空には、暁星二三輝くのみにて、未だ紅を潮せ【させ】ざるに、漁舟、三四、満帆に風をはらみて浮べり、波なほ収まらずして、轟々の響、天地を振はす。刻々秒々分々毎に、暁雲の形変じ、色変りて、夜は全く明けぬ。鶏の告ぐる、東天紅の声も聞ゆ。

出発の時も来たりぬ。我等は再び祝町に至りて、那珂川通ひの汽船に乗る。対岸に地引網もて、鮭とるを見る、上るに従ひ、漾々【ようよう　漂い流れるさま】の水、音なく声なく、寂々寞々【じゃくじゃくばくばく　寂しく静かなさま　寂寞】として流るゝ静かなる河の景色、二度見るも、なほ、飽きやらず、五時間近くを費して、水戸下市なる、停船場につき、隊を整へて

（二）農事試験場に向ふ。

市中は、吉田神社の祭礼にて、旗、提灯、など、家毎に飾りつけられて、何となく景気なり。苅り乾したる稲、掛けぬられて、千町田遠き、郊外に出づれば間もなく、試験場につく。

洋服の装に、麦藁帽かぶりて、草鞋はきたる「ハイカラ農夫」に、案内せられて、場内を巡覧す。諸標本室、農具室など見る中に、露の滴れ【たれ】ん許りに熟したる梨、紅燃ゆるばかりに熟したる水蜜桃、さては、葡萄、李、苺、甘柿、などの、アルコール漬など空腹の一行の眼には、殊更に、眼を引きたりき。家畜場に行けば、鶏や、豚や、牛馬など楽しげに群れ遊ぶ。過ぐれば菜園あり、農夫一人牛を追ひて、耕すあり。

「この牛、中々に乱暴にて、先日は人二人を傷けたり」

と説明者は云ふ、分析室にては、野鼠を殺除すべき、チブス菌を養ふ、顕微鏡にて、チブス菌を示されて、熱心なる説明を聞く、辞して、水戸中学校指して行く。

中学校は、水戸城趾なり。当時の水戸武士の面影周囲の空濠に偲ばれて、一の尾花【おばな　ススキ】のさゝやきも、昔を語るに似て、何となく、感慨の深きを覚ゆ。去つて弘道館に行く、所謂「第二公園」なり。幽邃【ゆうすい】閑雅【かんが】、五十年前の昔を思はしむるに足れり。烈公【徳川斉昭】白書【「自書」の誤植と思われる】の弘道館記(注3)は、八角堂中にあり、寒水石の一碑、面を埋むる所の快文字は、一読人をして、感奮興起せしむ。

予定は、さらに常盤公園【偕楽園　こちらは「第一公園」とも呼ばれた】に行くべかりしを、余す所の時間少きを以て、遺憾ながらこゝより、直ちに水戸停車場に向ふ。

（三）

上り上野行列車は、常南健児を乗せて亀城々下に到るべく、ポラットホームを放【離】れぬ。三日前再会を期したりし、千波の沼を過ぎて、友部の駅につく。此時日光方面に行きし、四年の人々と会して、こゝに旅の話は聞かれて、足尾の話しするもあれば、東照宮を聞くもあり、中には、水戸の羊羹と日光の羊羹を交へる人もありて、岩間も石岡もまたゝく間に土浦につく。時正に筑波の頂上に、日

日立鉱山専用電気鉄道

没して、霞湖の波収まれる時。」

(注1)**日立鉱山専用電気鉄道**　助川専用電気鉄道。略称「助鉄」とも呼ばれていた。現日立市の助川駅(現日立駅)から同市内の大雄院までを結んでいた。日立鉱山への物資の移送を目的として、1908[明治41]年8月に建設が開始され、11月に開通した。当初は貨物輸送専用の予定であったが、建設中の10月に通信大臣宛てに便乗許可願が出され、翌11月には便乗が認可された。

(注2)**高田保**　本紙第18・20号で詳述している。

(注3)**弘道館記**　江戸後期、水戸の藩校弘道館設立の目的と教育の基本方針を述べた書。一巻。徳川斉昭の命により、藤田東湖が起草。1838[天保9]年成立。当時の水戸学の真髄を伝える。1852[嘉永5]年注釈書『弘道館記述義』二巻が成立し、幕末の思想、政治に影響を与えた。

東京　1909年　中12回生2年次

この年は、1泊2日で東京帝国大学医科大学(現東京大学医学部)・小石川植物園・陸軍中央幼年学校・二重橋・動物園・帝室博物館(現国立博物館)を巡っています。医科大学・植物園・幼年学校については高田保が、二重橋は下村千秋(注4)が、動物園・博物館は市毛豊備(後年本校教諭国語　在職1928[昭和3]年～1936年)がそれぞれ担当し、『進修第13号』(1910年1月発刊)にその記事が掲載されています。

上野駅から歩いて医科大学に到着した一行は、解剖学教室に案内されます。高田の記事「解剖学教室」は、真に迫り、解剖学教室独特の臭いさえも漂ってくるようです。

「一、解剖学教室　二年　高田保

十月二十日、

上野に着いた。隊伍を整へて大学に向ふ。切通しを上つて本郷区役所の横へ折れて大学の構内にはいる。青い顔をした人、顔中腫物だらけの人、繃帯した人、種々な上病人や臭い人だちに幾らも会った。病院の患者と見える。ずうつと往つて左りに折れて一行九十何人が三線を画いて、解剖学教室の前に集まる。

何処からか薬の香が漂つて来る。

「臭いなあ」

「何だろう？」

「これぁ屹度【きっと】何ちたど……あの人間を漬けとく臭ひだど」

「死んだ人の臭ひぢやあんめいか？」

僕はたゞ薬の香だと思つた。

小使が玄関から「どうぞこちらへ」と呶【怒】鳴る。松山【登熊　体育　1906[明治39]年～1913[大正2]年】先生が例の大きな声で、それそれ注意を言ひ渡される。口々に「気味が悪いなあ」といひながら入口から少し入つた所で、ゲートルの皮を外して靴を脱き、白い解剖服とでもいふやうなのを着た三十前後の眼鏡をかけた七分三分に前髪を別【分】けた人に案内せられて、長い廊下を黙つて歩む。全軍粛として一語を語るものなし。解剖室、名を聞くだけでも今将に僕等の眼前に現はれんずる恐るべき何かゞ想はれるのだ。

案内の人は扉に手をかけた。把手がまわる。ギーと音して解剖室の戸は愈々開かれた。颯と異様の悪臭が鼻を撲つ。

「悪い塩鮭を炙い【やい】てるやうな臭だ」とS君が言つたが、未だ穿つちや居ない。生まれて【数え年】十五年来未だ嘗つて嗅いだことのない臭だ。

足がすくむ、心が跳る、むかつく、勇気を出して敷居を跨いだ。

瞬間！、ずらりと横たへ列べられた死骸が！。

「アリャ！」と誰れも彼も驚きの叫びを発した。

その筈である。たゞ一つ横へてあるのを見てすらも気味の悪い死骸、吾等同類の哀れな死状、それが何う【どう】でしよう、凡そ二十も、長さ六尺横三尺位の寝台の如な上に、真白い布帛を敷いて真白い布帛を被けてある中から、ニヨキツと手を出し足を出し、通路を隔てゝ頭合せに行儀よく並べられてある。あゝその黄色いやうなぶくぶくした手足。案内の人は台に近寄つて白い布をバーツと取り除けて往く。腹部を裂き胸を割つた惨たらしい死骸が出る。女がある、男がある、爺さんがある。八字鬚いかめしい亡者もある。

僕は怖る怖る近く立つて一人の死人の顔を真正面に見た。年の頃は四十位、鼻下に黒い美髯を貯へてあるけれど何所となく凶悪の相が備はつてる奴。僕は震へ上がつた。

どんよりした死人特有の眼で僕を睨んだのだ。その澱んだ眼玉の底には「取りつくぞ」といふ精神が読める。そして白い歯を剥き出して笑つている。

僕は此時も帽子を鼻に当てゝ置くことを忘れはしなかつた。帽子は悪臭を避ける唯一の武器だつたのだ。帽子を鼻の上に被せて、片手で押さへる。長い間には段々息がつまつて来る。堪へられないで帽子を押さへてる手をゆるめれば容赦もなく変てこな臭が襲つて来る。これには殆ど堪へられなかつた。愈堪へられなくなつて僕の足は宙を飛んで以前の廊下に出た。帽子が鼻を離れる、思はず深呼吸をやつて仕舞つた。

次ぎに標本室を見た、それから再びもとの落葉散り布く庭に出た。」

次の小石川植物園では、明治初年に来日したと云う英国人宣教師が、引率の松山・高野両先生を何とか話に引き込もうとして、二人から離れません。高田はその姿を皮肉を交え、克明に記述していますが、小石川植物園については、

「……、【庭は】決して悪くはないが箱庭的の小規模なところが気に喰はぬ。……。」と素っ気無く済ましています。

植物園で昼食を済ました後に向かった陸軍中央幼年学校では、副官の清水中尉が案内説明の労を執ってくれました。予科1年生の機械体操の授業では、活発な掛け声と挙動、元気横溢の様子に感心していると、清水中尉が、

「此の学校の生徒等も、もとは徒らに器用な芸当を悦んで、盛んに軽業式の事をやつたものだが、今ではそんな曲芸に重きを置かぬ。精神元気を養ふことを主とする。すなはち、芸を見ずしてその元気を見て居る。」

と話されました。高田は、

「……。何も僕が体操が下手だから言ふのではないが、中尉の言は大に僕の意に適つた言葉である。……。」

と、いたく感銘を受けた様子。学校の歴史や現況の説明を聞き、諸教室を見て回るうちに、自分も入学してみたいような気になったと書いていますが、炊事場へ行くと、

「……。副食物が葱だらけなのを見て、

「いやこんな学校には入りたくはないと思つた。僕は一体、葱は大嫌いなので。」

と、後年の評論に通じるような風刺とユーモアとで、記事を終えています。

翌21日は、銀座から丸の内に入り、凱旋道路(現内堀通り)を進んで、二重橋外に。ここで各小隊皆列を正して松山先生の号令で、皇居に向かい最敬礼を行いました。下村はこの時の感激を、

「……。たゞ何となく『有り難い、かたじけない、尊い』といふ感がむらむらと心の底から湧き上がつて、脱帽して恭しく低れた頭を、暫くは上げることも出来ないで、涙を呑んだ。森厳の気にうたれたのだ。……。」

と、記しています。感激の二重橋から上野に出て、動物園・博物館を見学。そこでの様子は市毛が流暢な候文で書いています。見学を終えた一行は、午後5時発の汽車で帰途に就きました。

翌年からは日程が2泊3日ないしは3泊4日となり、見学先に靖国神社・陸軍士官学校・石川島造船所・商船学校・美術学校・浅草寺・泉岳寺などが加えられています。

(注4)**下村千秋**　本紙第18号で詳述している。

(高21回　松井泰寿)